

世界一周の旅を終えて

金光時代(国・6)

去る2月22日、小雪の舞う神戸港から世界一周の旅に出た。NGOのピースポート(3万1500t)で、建造50年、国際条約でやがて廃船となる老朽蒸気船。乗客940名、乗組員450名の人たちと運命を共にした。3ヵ月半という長旅は不安だった。参加者は1人参加の人が7割、いろんなカップルの人たちも多く、16歳の少年から92歳の老人まで。なかにはガンの告知で余命少ないという人も居られた。

この船は豪華客船と違い、各寄港地で中古マシン、自転車、衣類、文房具、おもちゃ等を贈り、地元の人たちと交流しながらの観光であった。船の中の生活は退屈することはない。乗客同士で企画し、お互いに楽しむ。いろんな芸達者がいて参加しなげりや損。社交ダンス、コーラス、手話、英会話などの催しがあり、適当に習得すると発表会がある

またヒナ祭り、赤道直下の大運動会、のど自慢、囲碁大会、仮装行列等。午前と午後、毎日映画がある。室内では終日ビデオ上映、居酒屋、美容室、カラオ

ケ、コインランドリーと年相応に何でもある。陸が恋しくなると、寄港地で下船。それぞれのツアーに分かれて気分転換だ。

特に印象深かったのはイースター島。溶岩の島で岸壁がないため、5キロほど沖に船を泊め、9人乗りのテンダーボートで700名を運ぶ。本船から梯子を降ろし、木の葉のように上下する船に乗り移る。救命胴衣をつけ、赤銅色の船頭が手を差しのべてくれて乗り移るのだが、私は足がすくんでなかなか前に足が出ない。9名が揃うと波しぶきを上げて島に向かう。

入江は陸地だから下船は楽だ。まず大きなモアイ像が並んで迎えてくれた。大きさも表情もみな違う。10人乗りのバスで草原を走る。野生の牛や馬がのどかに草を食べている。島全体で390体ものモアイがある。昔、部族の争いで倒されたもの、またチリ地震のとき倒れたもの等。1992年、日本の大手クレーン会社が3年かけて15体のモアイを立て直すことに成功した。帰りは陽が暮れて懐中電灯の明かりで本船に戻る。夜のレストランは島



イースター島のモアイ像

での話題で賑やかだった。次にリビア。この国は一般観光が近年まで許可されなかったため「ローマを凌ぐ遺跡」といわれる世界遺産が見事な保存状態で残されていた。まず軽飛行機で砂漠のオアシス、ガダーミスへ向かう。約30分眼下に広大なサハラ砂漠を見ながら草原に着陸した。

バスで白い城壁と椰子で囲まれた場所から地下に降りる。迷路のように入り組んだ道と個室が続き、外の暑さを忘れさせる涼しさ。その一室のレストランで昼食をとる。アラバスク模様の敷物に、一面鮮やかな塗装の仏画や壁画に囲まれてリビア料理を頂く。午後から果てしなく続く砂漠の一角にラクダが10頭。真黒の布で全身を覆い、目だけを出した売り子が声を掛けてくる。ラクダは5分くらい乗って1ドル。私は腰を痛めていたので乗るのはあき

らめた。続いてエリトリア。隣国エチオピアとの30年にわたる独立戦争を経て、1993年に独立した若い国。その傷跡はまだまだ深く、港町マッサワは観光スポットとは無縁で何にもない。ピースポートはこの国の若者にピースボールを贈り続けて10回目。ここでは「汽車乗車体験」コース。戦争中、線路の鉄は武器に、枕木は燃料に、機関士は戦場に狩り出され、長年運行中止されていた。復興整備が進み、その汽車で大地を駆け抜け、車窓からの風景は草原と小屋のような民家。家畜を追う瘦せた少年、所々に難民キャンプの集落、年中雨も降らず食糧不足が続き、よくぞ生きていることと思う。紅海に面したこの国は、灼熱の太陽とミネラルたっぷりの荒塩は最高。(次頁に続く)



世界1周のピースポートの航路(円内は筆者)